

5月19日 特別講演
14:20 - 15:20 1013 教室

死者について語る、死者に語りかける

Pierre PACHET 氏 (作家、フランス政府派遣文化使節)
司会：根本美作子 (明治大学)

1971年に書かれた精緻で深い感動を呼ぶ文章のなかで、カネッティは蜂谷道彦医師の『ヒロシマ日記』に触れている。同医師が爆弾の投下された1945年8月6日から9月末までに書き留めたこの日記の中にカネッティは、自己への配慮、生き残った者たちへの配慮、目撃することを記録したいという欲望などを見出し、わけてもこの日本人医師の「死者を敬う気持ち」に注目している。大量死であったにもかかわらず、この医師は死者の一人一人に思いを馳せようと心がけているのだ。

私はまずこの死者への配慮について考えたい。この配慮は、物語の形式をとったり、故人の伝記、あるいは故人の人格または人生の一部の再構成へと導いたりする。こうした本を私はこれまでに二冊書いた。それぞれかなり異なった性質の本ではあるが、二つとも伝記ではなく、「墓碑」のようなものであると言えるかもしれない。墓碑とはつまり文字に覆われた物体で、その機能は、ある配慮、または負債の気持ち、罪の意識を表明しながら、死が破壊しようとする絆をなんとか保とうとすることだ。伝記は素材を集め、編成する。墓碑は死者への配慮に、目に見える形を与える。

こうした仕事はある謎、一つの逆説へと至る。というのも、こうした配慮の下で一人の死者について語りはじめると、いつしかその死者に語りかけていることに気付くのだ。まるでその死者が死んでいないかのように、言葉や思いを受け取ってくれる人であるかのように。この点について、ソフォクレスの『エレクトラ』を巡ってかつて私の書いたことを元に考察してみたいと思う。そこで私は、死者に語りかけること、死者の不在において、死者の不在を出発点に、死者を受取人として語りかけること、そのうちのうちにすべての言語の、すべての語りの可能性を見出そうとしたのである。

5月19日 ワークショップ
15:40 - 17:40

1. Pratiques pédagogiques innovantes dans l'enseignement du français — langue et littérature —

1123 教室

Jean-François Rochard (attaché de coopération pour le français, Service culturel de l'Ambassade de France au Japon)

Monique Le Lardic (Université Aoyama / CLA, Besançon)

Chizuko Hashimoto (Université Nagasaki / Formatrice TV5)

Manako Ôno (Université Gakushûin)

Tadako Ichimaru (Université Meiji-Gakuin)

Qu'entend-on par *innover* ou *innovation* ? Le fait d'introduire de nouvelles technologies en classe de français (langue et littérature), qui évoluent de jour en jour, en démultipliant les possibilités de pratiques pédagogiques ? Ou bien d'adapter, de rénover ou de moderniser nos pratiques pédagogiques en tenant compte des

contextes institutionnels et éducatifs propres à chaque situation d'enseignement ainsi que des attentes des étudiants en matière de pédagogie des langues et des cultures ?

Les quatre intervenantes nous proposent à partir d'expériences et de contextes variés des pistes de réflexions sur certaines pratiques pédagogiques innovantes. Monique Le Lardic évoquera ce qu'on peut entendre par *innovation, changement, progrès* dans le champ didactique, ainsi que les conditions d'émergence et les *traces* des innovations. Chizuko Hashimoto montrera comment construire des activités pédagogiques à partir de TV5 pour inciter les apprenants à apprendre le français différemment et à se confronter à la réalité, parfois à la difficulté, du français. Manako Ôno présentera une approche originale de l'enseignement de la littérature, bien connue en France, mais peu pratiquée au Japon : *récitation et reconstitution* de textes. Cette forme d'oralité, détachée de la conversation quotidienne, offre aux étudiants une situation privilégiée pour s'appropriier le texte français, en apprivoisant la musique de la langue. Tadako Ichimaru expliquera comment elle fait entrer dans la classe l'internet francophone. En choisissant des sites appropriés, il est possible, même pour les étudiants débutants, de *naviguer* sur le web francophone. L'objectif de cette aventure est de susciter la curiosité des étudiants et de les motiver à utiliser, souvent avec beaucoup de plaisir, le français.

Que cette table ronde soit une occasion pour échanger idées, pratiques, réflexions, et pour nous d'innover !

2. 詩を探る時間の旅

1126 教室

野村喜和夫 (詩人・コーディネーター) 鈴木和成 (横浜市立大学)
塚原史 (早稲田大学) 福田武人 (東洋大学)

21世紀の、見渡せば情報とエンタテインメントばかりな荒野。それはフランス語圏でも例外ではありません。でも、ふっと詩が欲しくなる瞬間があります。どうすればいいのでしょうか。とりあえず、詩を探る時間の旅にでも出てみましょうか。リラックスして、ざわめく言葉の森のなかを。

ワークショップの手順として、コーディネーターは前もってつぎのような質問をプレゼンターにぶつけておきます。フランス語で書かれた詩の歴史をふまえて、あなたにとってのもっとも「ポエジーな年」をえらぶとしたら、西暦何年ですか。その理由は何ですか。その年から現在へ、あるいは現在からその年へ、どんなメッセージを運びますか。

ちなみに、コーディネーターは以下のような回答を考えています。1907年。ルネ・シャールが生まれた年。今年はその生誕100周年にあたる。シャールといえば抵抗としての詩、ということになる。だがもっと広く、シャールを介して、今日的な抒情とは何かと問えるはずだ。抒情とは、なにかしら困難な現在に直面したとき、詩においてその証言を引き受けること、証言を詩にまで高めると同時に詩を証言にまで近づけながら、どこまでもその交点をもとめてゆくことであろう。シャールはわれわれにそう伝えている。困難な現在の質はちがっても、このメッセージは十分示唆的だ。

3. ジュール・ヴェルヌ再発見

1133 教室

私市保彦 (武蔵大学・司会) 新島進 (早稲田大学非常勤講師)
芳川泰久 (早稲田大学) 石橋正孝 (パリ第8大学博士課程・コーディネーター)

ジュール・ヴェルヌ (1828-1905) は、一昨2005年に没後一世紀を迎えて空前の出版ブームを本国で巻き起こした。また、昨年暮れには初の校訂版全集の企画が始動するなど、この作家に対す

る関心は近年高まる一方である。このような状況下で、これまで等閑視されてきたヴェルヌを一人でも多くの方々に再発見していただく一助となればと願い、本ワークショップを企画した。

まず、ヴェルヌの編集者エッツェルの伝記を先頃上梓された私市保彦氏に、ヴェルヌとそれ以前の文学との関係、特にロマン派的な表現法からの脱却による科学小説の誕生を、新島進氏に、レーモン・ルーセルが具体的にどのヴェルヌ作品を読んでいたのか、作品から読み取れることをそれぞれ発表していただき、ヴェルヌの文学史的な再定位を試みる。石橋正孝は、地球の描写というヴェルヌのプロジェクトの意味をエッツェルの出版戦略を中心とする同時代の文脈の中に置き直して再考し、最後に、芳川泰久氏に「ヴェルヌ、ミシェル・セールからの可能性」という仮タイトルでお話いただく。以上の問題提起を出発点として、空想科学小説に留まらないヴェルヌの豊かな可能性をめぐって、参加者の皆様と議論を深めたいと考えている。

4 .世界のフランコフォン 1134 教室

砂野稔幸 (熊本県立大学): セネガルの社会と言語
立花英裕 (早稲田大学): クレオール性が提起したもの
藤井慎太郎 (早稲田大学): ベルギーの演劇と言語
ムニフ・ワシム (明治大学博士課程): チュニジアの社会と言語
小畑精和 (明治大学・コーディネーター): ケベックの社会と言語
本ワーク・ショップでは、「世界のフランコフォン」をテーマとして、ポスト・コロニアル社会や、英語優位がますます進む世界でフランス語の果たす役割を考えてみたいと思っています。

一人 15 分づつほど報告・発表を行い、その後 30 分ほど会場を加えて質疑応答・討論を行いたいと考えております。

5 .人間喜劇という名の芸術工房 1136 教室

柏木隆雄 (大阪大学・司会) 松村博史 (近畿大学) 鎌田隆行 (名古屋大学) 澤田肇 (上智大学) 村田京子 (大阪府立大学)
視覚芸術と『人間喜劇』との関係を様々な視点から分析する。4 人の発表を出発点に、参加者ととも文学と芸術について討論を進めていきたい。(1)松村「バルザックと風俗画 『ピエール・グラス』を中心に」バルザックにおける芸術論と小説観の関わりを、『人間喜劇』に何回か登場する絵画の「コレクション」の内容とその変遷から探っていく。(2)鎌田「バルザックにおけるテキスト内テキストについて」バルザックの小説の中にはしばしば図像、広告、新聞記事等の「現実物としてのテキスト」の挿入が見られる。本発表では『あら皮』『幻滅』などを取り上げ、その視覚的な美学性の問題を考察する。(3)澤田「偏愛と不在の軌跡 ニコラ・プッサンからジュール・デュプレまで」19 世紀最大の芸術人名辞典とも言える『人間喜劇』どの画家が評価され、誰が無視されているかを発点として、文学と絵画の対話の有様を、特に風景において探る。(4)村田「メタファーとしての図像」バルザックは人物像を描くにあたって、有名な画家や絵画を引き合いにすることがしばしばである。ここでは主に女性の portrait に焦点をあて、絵画との関連をジェンダーの視点から探る。

5 月 20 日 研究発表会

午前の部 9:45 - 11:15

第 1 分科会 語学・語学教育 1126 教室

司会: 菊地歌子 (関西大学)
1. 中等教育における e-Learning の展開
山崎吉朗 (日本私学教育研究所専任研究員)
2. カテゴリー化の観点から見た *Quel...!* 型感嘆文の考察
山本大地 (大阪大学博士課程)

第 2 分科会 18 世紀 1133 教室

司会: 佐藤淳二 (北海道大学)
1. ルソーの挑発(?) 共和国礼賛、その裏側にあるもの
越森彦 (首都大学東京非常勤講師)
2. ルソー『新エロイズ』の文体における音楽的要素 韻律の分析を中心に
原田裕里 (パリ第 4 大学博士課程)

第 3 分科会 19 世紀(1) 1134 教室

司会: 松澤和宏 (名古屋大学)
1. フロベール『純な心』におけるフェリシテの「盲信」について
橋本由紀子 (青山学院大学非常勤講師)

第 4 分科会 19 世紀(2) 1136 教室

司会: 朝比奈美知子 (東洋大学)
1. マルセル・シュウオプと反ユダヤ主義 レオン・ドーデとの友情をめぐって
鈴木重周 (横浜市立大学博士課程)
2. 世紀末イデオロギー小説におけるローマ ブールジェ『コスモポリス』とゾラ『ローマ』
田中琢三 (日本学術振興会特別研究員)

第 5 分科会 19 世紀(3) 1123 教室

司会: 川那部保明 (筑波大学)
1. ランボアの錬金術 「母音」, 「H」の生成
折橋浩司 (早稲田大学博士課程修了)
2. マラルメの典型について
福山智 (早稲田大学博士課程)

第 6 分科会 20 世紀(1) 1146 教室

司会: 星埜守之 (東京大学)
1. 植民地主義の暴力と伝統社会の軛 ムールード・フェラウン『大地と血』におけるカピリー社会の表象
茨木博史 (東京大学博士課程)
2. マルローにおけるフロイト 『反回想録』序文
大貫明仁 (明治大学博士課程満期退学)

第 7 分科会 20 世紀(2) 1143 教室

司会: 合田正人 (明治大学)
1. 『グラマトロジーについて』再考 一ソシュール研究者からの遅れた応答
金澤忠信 (東京大学産学官連携研究員)

日本フランス語フランス文学会 2007 年度春季大会

2. 非常事態にあるシュルレアリスム 戦後ジョルジュ・バタイユの評価から
丸山真幸(一橋大学博士課程)

午後の部 12:30 - 14:00

第8分科会 中世・絵本 1134 教室

司会 1: 岡田真知夫(愛知県立大学)
1. 『ギヨーム・ド・ティール年代記続編』の未発表断片写本について
小川直之(慶應義塾大学非常勤講師)
司会 2: 私市保彦(武蔵大学)
2. カストール絵本における絵の力
松尾春香(九州大学博士課程)

第9分科会 19世紀(4) 1126 教室

司会: 國枝孝弘(慶應義塾大学)
1. モーパッサン、ポエジー・レアリスト
足立和彦(大阪大学博士課程)
2. メロドラマの中の父性 なぜ父は盲目なのか
浦山健太郎(首都大学東京博士課程)
3. Pierre Loti: malheureux ou farceur
Peter TURBERFIELD(東邦大学)

第10分科会 19世紀(5) 1133 教室

司会: 小倉和子(立教大学)
1. 記念碑の外へ マラルメ「ヴェルレーヌの墓」分析
熊谷謙介(東京大学博士課程)
2. 私詩が世に現れる時 メリー宛 3 詩篇の公開とその背景から考えるマラルメの 1896 年
永倉千夏子(明治大学非常勤講師)

第11分科会 20世紀(3) 1153 教室

司会: 田母神顕二郎(明治大学)
1. LE COMBAT DE JACOB
Geneviève FONDEVILLE(上智大学)
2. クロード・カウンの『ヒロイン達』における新しい女性の神話
西岡道子(神戸大学博士課程)

第12分科会 20世紀(4) 1123 教室

司会: 湯沢英彦(明治学院大学)
1. 『失われた時を求めて』における遅れの意識について
岩津航(関西学院大学研究員)
2. ブルーストの地理的現実性 バルベックの位置の韜晦をめぐって
川本真也(ストラスブール第2大学)

第13分科会 20世紀(5) 1143 教室

司会: 中村弓子(お茶の水女子大学)
1. 表現と自覚 シモーヌ・ヴェイユの思索をめぐって
今村純子(慶應義塾大学非常勤講師)
2. ヴァレリー『レオナルド・ダ・ヴィンチの方法への序説』におけるダ・ヴィンチとファラデーとの関係
木村正彦(ITEM 研究員)
3. 言葉の暴力 ヘルクソン哲学における隠喩(メタファー)と類比(アナロジー)の問題
藤田尚志(日本学術振興会特別研究員)

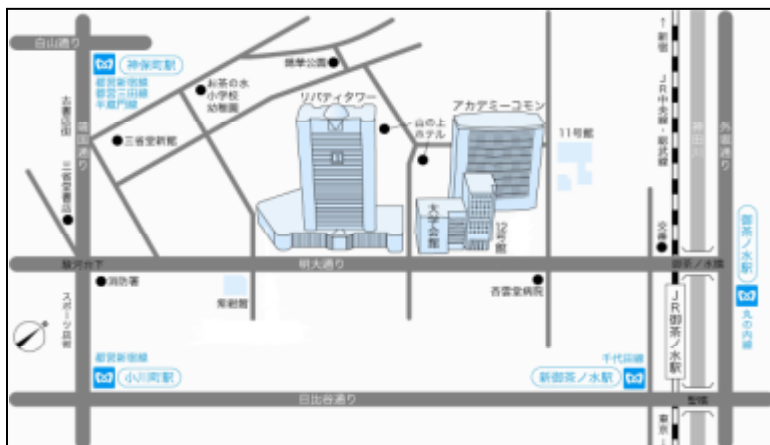
第14分科会 20世紀(6) 1136 教室

司会: 小川美登里(筑波大学)
1. レーモン・クノーの 小説=詩 について 「小説の技法」をめぐって
久保昭博(京都大学助教)
2. 遊戯と記憶 クロード・シモン『歴史』をめぐる考察
熊野鉄兵(東京大学博士課程)
3. マルグリッド・デュラスにおける「記憶」と「忘却」のエクリチュール
関未玲(立教大学非常勤講師)

第15分科会 20世紀(7) 1146 教室

司会: 上田和彦(関西大学)
1. イメージの「イリア」 サルトル、レヴィナス、ブランショ
郷原佳以(日本学術振興会特別研究員)
2. ユダヤ人の超自然的使命 カトリック的反ユダヤ主義のなかのレヴィナスとマリタン(1921~1942)
馬場智一(パリ第4大学博士課程)

駿河台キャンパス案内図



交通案内

JR 中央線・総武線 御茶ノ水駅 徒歩 3 分
千代田線 新御茶ノ水駅 B1 出口 徒歩 6 分
丸の内線 御茶ノ水駅 徒歩 5 分
都営新宿線・都営三田線・半蔵門線 神保町駅
A5 出口 徒歩 8 分
都営新宿線・千代田線 小川町駅
B5 出口 徒歩 5 分